農業

代々受け継がれてきた農村に
新しい風が吹き込む

3年前に新規就農した鈴木康太さん（谷川）

那珂川町の農業を取り巻く状況は、担い手の減少や高齢化など、依然厳しいものですが、新しい品種の栽培や、農業体験を中心としたグリーンツーリズムの活用など、新たな動きが活発化しています。今後は地域の特性を活かした取り組み等を行い、新規就農者の確保や環境整備のための支援体制の強化をしていきます。

3年前に新規就農した鈴木康太さんは、地元の農作業を受託していた祖父が、高齢で仕事ができなくなってしまったため、父親の鈴木明信さんが後を継ぎ、息子の康太さんも手伝い始めたそうです。

会社組織として稲刈りのみ受託し、お米は各家庭が食べる分以外を買い取る形式で、地域全体が豊かになれるよう、なるべく高く買い取るよう心がけています。

「ここのお米は本当においしいんです」と自負する鈴木さん親子。お米をブランド米にすることも検討しています。

農業体験で魅力を伝える

梨の収穫体験会

サツマイモ掘り

JAなす南青壮年部・町農業委員会とわかあゆ認定こども園との食育交流事業でサツマイモの苗植え・収穫を実施

ゆりがね米

那珂川町のおいしいお米をたくさんの人に知ってもらいたい、食べてもらいたいとの思いから、那珂川町中山間地域活性化協議会では、「那珂川町ブランド米研究部会」を設立し、食味スコア75以上を基準とした高品質なコメをブランド米として認定し販売することとなりました。

ネーミングは、地元馬頭高等学校の生徒からアイデアを募り、パッケージデザインは、3年生の金山直樹さんが考えた作品を採用しました。

「ゆりがね米」は令和4年産から販売を開始しています。現在はインターネットでの販売ですが、今後道の駅等でも販売が予定されています。

[写真左から2番目]金山直樹さん(馬頭高校3年)

金山直樹さんのコメント
「生産者をイメージし、お米を手に取っているイラストにしたいと前から考えていた。ブランド米で町の良さを広めたい」

NAKAGAWA TOWN TOPICS NAKAGAWA TOWN

那珂川町の取り組み　[新規就農支援制度]

那珂川町では、就農希望者に向けて、就農相談から経営開始・発展まで、関係機関が一体となってトータルサポートをしています。

そのうちの一つ、インターンシップを利用して令和4(2022)年4月から研修生になった山本幸志郎さんは、父親から高齢化の影響でイチゴ農家が減っていると聞き、やってみようと決心したそうです。取材時には那珂川町のとちぎ農業マイスターである川上早春さんの元で研修しており、初めはイチゴの知識がゼロでしたが、今ではイチゴに関する知識全般を学べたそうです。

いちごの選別作業

1年間の研修期間を経て、同5(23)年4月からは那珂川町でイチゴ農家として自立する山本さん。現在の心境は、不安よりも楽しみでしょうがないとのことでした。

研修生 山本 幸志郎さん
(小川)

農業

新しい時代へ向けて
次の世代へタネをまこう

馬頭高校農場での収穫体験

馬頭高校では平成31(2019)年度から、普通科選択科目に「農業と環境」が新たに設定され、2,3年生が授業の一環として、高校内の畑で様々な野菜を育てています。収穫の時期には地域の園児を招いて収穫体験を行っています。

この取り組みは、世代間交流を通して人間性、社会性、協調性等を養い、地域に貢献できる人材育成を目的に開催しているそうです。

畑に集まった高校生と園児はグループに分かれ、高校生のサポートを受けながら園児たちが収穫に挑戦します。高校生たちは積極的にコミュニケーションを図り、すぐに打ち解けた中での収穫となりました。

ジャガイモの収穫

西洋野菜の収穫を町長に報告

冬玉ねぎの収穫体験

超大球キャベツの収穫

農産物直売所

町内7か所にある農産物直売所は、地元の採りたて新鮮野菜を中心に旬の果物等が店頭に並びます。安全安心な食材を皆さまにお届けできるよう、有機肥料の利用により農薬使用を少なくした安全な農作物の提供を行なっています。

[写真上]
道の駅ばとう
[写真下左]
小川ゆうゆう農産物直売所
[写真下右]
久那瀬農産物直売所

久那瀬農産物直売所店内

まちの輝く人、輝く光あり

まちの金メダリスト

インタビュー Interview

陽だまり農場・馬頭農村塾

濵中 陽平さん、まどかさん

（大山田下郷）

農業や食に興味がある人、まずは体験しに来て！農業の楽しさ教えます

写真左から紅璃さん、陽平さん、まどかさん、ひかりさん

和歌山県出身の濵中陽平さんは、大学生まではまったく農業とは縁のない生活だったそうです。大学時代に将来について考えるうちに、海外青年協力隊に参加し、海外へ行きたいと思い立ちます。その際海外から学生を受け入れ、母国で農業指導者になる人材を育成しているアジア学院を知り、農業を学ぶことにしました。ある時、海外から来た同級生に「日本にもいろいろな問題があるのに、どうして海外へ行くのか？」と問われ、悩んだ末にまずは日本で農業をやってみようと決心したそうです。その後、経済的に自立できる農業を学べる帰農志塾を経て、縁あって那珂川町で就農しました。妻のまどかさんとは帰農志塾で出会い、現在は二人のお子さんと四人で暮らしています。

濵中さんが経営する陽だまり農場では、有機農業で年間約150品目の野菜を育てています。品目がかなり多いのは、野菜を作る上でどうしても収穫に当たり外れの年があるためです。例えば、同じナスでも5～6品種を育てることで、どれか一つは収穫することができ、安定供給ができるそうです。

また、濵中さんは「就農当初は有機農業のメリットを持続可能で環境にやさしいことだと思っていましたが、コロナ禍において流通等の問題により食が不安定になった時、有機農業の自給自足の生活は、災害時に強いのが魅力だなと考えるようになりました」と言います。濵中さんの考える自給自足は、農場の野菜を食べている消費者も含まれています。農場の畑は消費者のものでもあり、畑仕事ができる人には手伝ってもらうのだそうです。

そんな濵中さんが力を入れているのが、新規就農や移住を考えている人たちのサポートをすることです。将来を模索している学生や農業・食に興味があるけれど一歩踏み出せない人などに、まずは来てもらって体験できる場所づくりを企画しています。その後実際に就農したいという人には、具体的なアドバイスをしているそうです。「那珂川町はさまざまな分野にチャレンジしている人が多くいるので、そういう人たちと関わって欲しいと思います」という濵中さん。いろいろな話を聞く機会を提供することで、新規就農や移住への扉を開くきっかけになればと考えているそうです。

学生たちと一緒に作ったツリーハウス

「今後は、もっと町が活性化するよう移住者を増やしたいです」と熱く話されていました。

小松菜の収穫

静岡県から取り寄せた国産種のニワトリ
ニワトリのフンは有機農業をする上で大切な肥料

ツアーの食事で活躍するかまど

［写真左右］化石燃料に頼らない生活を模索して、現役でも使われている脱穀機